OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	白いヘレネーと黒いヘレネー(その一)
Author(s)	上村, くにこ
Citation	Gallia. 1986, 25, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10697
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

白いヘレネーと黒いヘレネー（その一）

上　村　くにこ

1．はじめに

「どんなに白い白も，ほんとうの白であったためしはない。一点の翳もない白の中に，目に見えぬ微少な黒がかくれていて，それは常に白の構造そのものである。(…) どんなに黒い黒もほんとうの黒であったためしはない。一点の輝きもない黒の中に微少な白は遺伝子のようにかくれていて，それは常に黒の構造そのものである[(1)]。」と書いたのは谷川俊太郎である。この白と黒の微妙な補完関係を，荒々しいまでに具体的なイメージとして指し示してくれるのが，ギリシャ神話にあらわれる，女性的白鳥のシンボルである。光と誉れに満ちた白鳥の白い身体は，暗黒と絶望を前提としており，又同時に一筋の光もささない闇の中にこそ，輝くばかりの白鳥が隠れている。この不思議な逆説は時代や場所にかかわりなく普遍的な感覚であるように思える。これをギリシャ神話から現代のヨーロッパ文学に限って，ざっとたどってみようというのが本稿の目的である。

さて近ごろのどんなシンボル辞典でも白鳥が両性具有者である，という事を認めている。男性としての白鳥の代表格としては，レダと交わったゼウス＝白鳥，女性としての白鳥の最高の表われ方としてゲルマン神話に登場する白鳥乙女が例として必らず引用される。古代ギリシャ人の目には白鳥は男性的に見え，古代ゲルマン人には女性的に見えたという事は，時代や民族の違いによって，白鳥のシンボルは全く正反対のメッセージを送り出すのだろうか，というような感を与える。しかしもう少し丹念に神話の中に散見される白鳥のシンボルのかけらを拾い集めてゆくと，事はそんな風には働いてはいないという事に気付く。むしろどの神話においても白鳥のシンボルは，全く対蹠的に対立する二つの極限の意味を同時に併せ持ち，しかもその対立項はあたかも共鳴するものを生み出すかのごとくに，他の対立項を呼び起す。勿論神話が物語られた場合は，そのコンテキストの中では白鳥は一つの意味を示すだけである。しかしその下にはそれとは正反対のメッセージが必らず潜んでいる。その上このメッセージは又お互いに対立するもう一対の対立項を生み出し……という事を繰り返す。あたかも二重の鏡に写し出すように，ニュアンスの違った意味が無限に浮かび上がってくるのである。

もう少し具体的に説明しよう。白鳥は復活する太陽のシンボルである，とよく言われるが，同時に闇の世界の住人である。白鳥の渡りは，上昇のイメージを伴っているが，同時

に失墜のめくるめきのイメージも伴う。白鳥は天上に住む善の代表者であるが，同時に地獄に住む悪霊でもある。男性白鳥は並ぶ者なき戦場の勇士であるが，ほんの小さな弱点のために死ななければならない運命を避ける事が出来ない。女性白鳥は完璧な女性美を示すが，同時にその美は不幸をもたらさずにはおかない，等々。ギリシャ世界の女性的白鳥といえば，まずオリュンポスの神々よりも古い，闇の女神グライアイと，ヘレネーをあげなければならない。もともと小アジアの地母神だったレダはそれ自身女性的エロスを代表しているが，白鳥との交わりから生まれた娘のヘレネーは，母娘一体となってオリュンポスの世界における女性なるもののシンボルとなったのである[(2)]。

2．白髪の処女，グライアイ

ボスポロス海峡をわたってからさらに「日輪の輝き昇るかたを目指し，わだつみの音をうしろにして[(3)]」進むと宇宙の果てをぐるりと囲むオーケーアノスの大河にたどりつく。この河を渡りさらに前方へ前方へと進むと巌のバラ園（キステーネ）に到着する。そこは太陽の光も月の光も届かぬ漆黒の世界だという。そこの洞窟に白鳥のような姿をした処女達が住んでいるという。ヘシオドスによるとこれらの乙女は海の老人ポルキュスと，海の女神ケートの子で，生まれた時から白髪であった。それゆえ彼女達は老女を意味するグライアイという名で呼ばれた。ヘシオドスはさらに，美しい頬のグライアイは二人いて，一方は美事な衣裳をつけたペンペレド（蜂の一種）と呼ばれ，もう一人の方は淡紫色（クローカス）の衣をまとったエニュオ（戦闘を示す）と呼ばれた，とつけ加えている[(4)]。異説によれば二人姉妹ではなく，三人姉妹であって，その名をディノー（恐ろしき女），ペルソー（ヘカテーの別名）という。三人目の名前は明らかでない。ゴルゴンも同じ父母から生まれた姉妹で，グライアイと同じ場所に住んでいる。ペルセウスのゴルゴン退治の話を読むと，グライアイはゴルゴンの洞窟を守る役目をしていたらしい。二人（三人）の番人は共同でたった一つの目と歯しか持っていなかったという。それゆえ交替で目と歯を使って見張りをしていた。ペルセウスは一人が役目を終って目と歯をはずし，他の者に渡そうとした時，そっと側から手を出して目と歯を盗み，目は湖に捨ててしまった。目の見えないグライアイはもう何の役にも立たず，ペルセウスはまんまと洞窟に侵入した[(5)]。

だいたい以上が文献に残る白鳥乙女の物語であるが，なんとなく間の抜けた怪物のような気がしてくる。その姿はどんな風であり，どんな鳴き声を立てたのであろうか？アイスキュロスには「ポントスの娘達」という劇作があり，その断片は残っているのだが，残念ながらグライアイについての私達の好奇心を満たしてはくれない。しかし宇宙をつき抜けて太陽の沈むよりむこうにまで飛んでゆく白鳥への畏怖がこの怪物を生み出した事は疑い得ない。グライアイはオリュンポスの世界が成立する以前の，最も古い神々の世代に生まれた恐ろしい女神，モイライやエリーニュエス，ヘスペリデス等と同じ仲間なのである。ゴルゴンが地母神であったと同様，グライアイも又地と海の守護神であったろう。それに

してもアポロンの従者であり，極北の国，ヒュペルボレオスの地に住む男性的白鳥とはなんと対蹠的であろうか。アポロンの白鳥達が光と天上のイメージで光り輝いているのと正反対に[6]，グライアイは目を退化させるほどの深い夜の中で，英雄によって退治される運命を待っていた。グライアイの頬は美しかった，とヘシオドスは歌っている。エキドナも美しい頬と美しい上半身の下に，太く艶やかに光る蛇身を持っていた。グライアイの下半身は巨鳥の姿をしていたのだろうか？セイレン達とそっくりの姿をしていたのかもしれない。男性のセイレンの名前は，蜂の一種を指す言葉だったから，ペンペレドと何か関係があるかも知れない。ゴルゴンにも翼が生えていたのだから，グライアイはポセイドンと交わる前の美しいゴルゴンそっくりだったのかも知れぬ。グライアイがまとっていた淡紫色(クローカス)の衣とは何であろうか？太陽の薄日の名残りの色であろうか？

グライアイについてはこれ以上知るすべはないのだが，次に述べるヘレネーの光輝と，暗黒に棲むグライアイの間には，対立と補完という，独得な関係があると，私には思われる。

3．ホメロス的ヘレネー

ホメロスの“イーリアス”と“オデュッセイア”に出現するヘレネーは栄光につつまれた女性である。彼女の美しさはオールマイティである。その美貌を見てはどんなに猛々しい勇士も有徳の武将も心をとろかす。彼女が適齢期に達した時は，ギリシャのほとんどすべての王子が求婚したという。夫も子供も捨て，夫の財宝を盗んで愛人と出奔し，それがトロイア戦争という十年戦争の原因となったのである。普通ならば許されざる悪女であるのに，その事が称讃の的になるのであるから，彼女の美しさには女神に近い神通力があると言わねばなるまい。

ホメロスではヘレネーには“白いかいなの”とか“美しい髪の”という枕詞がつき，いつも“白く輝く”亜麻の寛衣をひるがえしているように描かれている。“イーリアス”に登場するヘレネーは現夫パリスと攻め込んできた前夫メネラーオスが一騎打ちをするところを，トロイアの城門の上に立って見物しようという女性である。(女神イリスにギリシャへの望郷心をふき込まれて，とホメロスは説明しているが。)傍に立つ，パリスの父親プリアモスは，彼女の複雑な立場に同情してなぐさめる。

> ここへ来て，いとしい娘よ，私の前に座るがよい。あなたの以前の夫だの，義理の兄弟，友達などを眺めるように。格別あなたに責任があるわけでない，神々にこそその責任はあるというもの，神様がたが私に対して，アカイア人との涙に満ちた戦いを仕掛けられたのだ[7]。

一騎打ちはパリスの劣勢で，あやうくメネラーオスに殺されそうになったところを，ア

プロディーテーが介入して白いもやでパリスを包み味方の陣内につれてゆく。ヘレネーは女神の介入に抗議するが逆におどされ，しぶしぶパリスをむかえてこう言う。

> 戦さをぬけていらしたのね。ほんとにあなたが私のもとの夫（…）に討ちとられて，そのままお死にでしたらようございましたのに[8]。

こんな憎まれ口に対してパリスは言葉を尽して妻をなだめ，二人は閨に入る。その間パリスを見失なったメネラーオスは野獣のように戦場をうろつきまわっていた。トロイア方にしろ，ギリシャ方にしろ，戦いの原因であるヘレネーを非難しようなどとは思いもよらない。ヘクトールもパリスの戦士としてのふがいなさはそしるが，ヘレネーに対しては尊敬と思いやりを残して死地に赴くのである。

トロイア陥落後，ヘレネーの運命はどうなったか。“オデュッセイア”によればヘレネーは信じられないほどの幸運に恵まれている。メネラーオヌの手にもどったヘレネーは夫とともに八年間の漂流をした後，ギリシャのアルゴスにもどる。メネラーオスは帰路神々から様々な援助をうけ，その上将来の予言もしてもらう。それによるとメネラーオスは不死となり，生きたままエーリュシオンの野に送られる，という。ヘレネーの夫に対してはこのような特権が与えられるのである。メネラーオスは帰国してギリシャ一の金持になる。“月か日か見まごうばかり”の彼の館の豪華さを，ホメロスは何度も描写している[9]。そこでヘレネーはたくさんの侍女にかしずかれながら，織物や刺繍にあけくれる，模範的な貞女の生活をしている。漂流中に逗留したエジプトで彼女は秘薬の術をさずかり，その上ゼウスからは予言の能力をもらう。父オデュッセウスの行方をたずねてやってきた息子のテーレマコスをそれらの術で慰めてやる。テーレマコスはそれに対して「わたしは国で永遠に神のようにあなたをうやまいましょう。」という感謝の言葉を残してイタケーに帰るのである[10]。ヘレネーがテーレマコスに語って聞かせたところによると，オデュッセウスが乞食になりすましてトロイアの市内にまぎれ込んだ時もヘレネー一人がそれを見破り，そっと宮廷内に入れて歓待し，トロイア方の情報を与えたという[11]。これらヘレネーがした事はすべて神々の意志に従ってした事で，ヘレネーには何の責任もなく，むしろ神々の抗争に巻き込まれた，たぐいなく美しい犠牲者で，最後には美貌にふさわしい栄光を得た女性，というふうにホメロスは仕立てあげている。

4．ヘレネーの影

ホメロス以外のギリシャ・ローマ文学にはヘレネーはどんな出現をしているのだろうか。一言でいえばホメロス程の無条件の光栄は得ていないが，最後には必らず神格に近い崇められ方をしている，というのが結論である。これからそれらを検討してゆきたいと思うが，様々な異説が交叉して矛盾するところが多い。

まずヘレネーがどのように生まれたかという話からしよう。彼女は白鳥の卵から生まれた。父親は白鳥に変身したゼウスであるという点は誰しも一致するところであるが，母親に関してはレダともネメシスであるとも言われている。ネメシスは復讐の女神で，好色なゼウスを嫌って様々な動物に変身してゼウスからのがれるが，鵞鳥に変身したところを，白鳥になったゼウスが思いをとげ，その結果卵が生まれたという。それを羊飼いが拾ってレダに与えた。レダが生んだ卵は二つか四つで，青色をしていたとも，紅色をしていたともいう。レダは同じ晩に夫テュンダレオースからも子供を授かり，夫からはクリュタイムネーストラーとカストールが，ゼウスからは神性を受けたヘレネーとポリュデウケースが生まれた。先の二人の子供は母の胎内から，後の二人だけが卵から生まれた，という説もある[12]。

この双子の兄弟，姉妹という組み合わせは，白鳥神話の構造を天才的に暗示していると思う。まず女性対男性という対極に，男性方には死すべき英雄と死なない英雄の対立，女性方には美貌の光栄と女であることの不吉，という対立を見せるからである。男性方の矛盾は，二人とも双子座に昇天する，という形で昇華されるが，女性方の矛盾は著しい対立を見せたまま，統合される事はない。クリュタイムネーストラーはユング的に言えばヘレネーの影であると言えると思う。ここでクリュタイムネーストラーの運命をヘレネーのそれと対比させてみよう。

彼女は始めタンタロスの妻だったが，甥のアガメムノーンがこのヘレネーの姉に情熱を燃やし，まず彼女の夫を殺し，次に彼女の胸から嬰児をもぎ取って地面にたたきつけて殺した。双子の兄弟ディオクーロイが復讐にかけつけてきて，アガメムノーンの立場があやうくなったところを父テュンダレオースがとりなして二人を結婚させたという。彼にはこのころから暴君的支配者の性格がみられる[13]。アガメムノーンとの間にイピゲネイアを始め三人の娘と一人の息子が生まれる。ヘレネーはメネラーオスとの間に娘を一人もうけただけである。アガメムノーンはギリシャ方の総大将としてトロイアに出発したが，自分の狩の腕前をアルテミス女神より上だと自慢したため，アルテミスの怒りを買い，アウリスの浜で娘イピゲネイアを犠牲に捧げねばならない破目に陥いる。彼はイピゲネイアとアキレウスを結婚させるという嘘の手紙を書いて妻と娘を呼びよせ，母の嘆く目の前で娘をいけにえのために殺そうとする。その時のクリュタイムネーストラーの憤怒と悲しみはエウリピデスによって切々と表現されている。トロイア戦争はメネラーオスとパリスの戦いなのだから，当事者のメネラーオスが自分の娘のヘルミオネーを殺せばよい，と叫ぶくだりがある。彼女はヘレネーの負の部分をひきうけねばならないわけである[14]。

さて館に帰ったクリュタイムネーストラーは最初は貞節であったが，アイギストスと通じ，トロイアから凱戦してきた夫を殺した。ホメロスによると殺したのはアイギストスで，彼女は情人にひきずられる主体性のない姦婦のように描かれているが，アイスキュロスによればクリュタイムネーストラーが主謀者で，帰ってきた夫を歓待するふりをして風呂場に招き，漁の網をかぶせて身体の自由を奪ってから刺し殺したという。アイスキュロスの戯

曲の中で，ヘレネーの姉はこううそぶく。

> (…) このようにしてあの人は打ち倒れ，最後の息を引き取ったのです。でもそのとき切傷の口から烈しく血を噴き出して，まっかな血潮のしぶきを黒々と私の身体に打ちつけましたが，いっそどうして嬉しいもの，天の降らせる慈みの雨を，うけて喜ぶふくらんだ穂鞘の麦と同じに[15]。

彼女には夫を恨む理由が幾つかある。まず前夫を殺されて無理やり結婚させられたこと。夫が自分をだまして娘を犠牲に捧げようとしたこと，戦争中は捕虜のクリューセーイスに執心したためにアキレウスとトラブルを起し，さらに帰国の際にはトロイアの姫カサンドラを連れ帰って，后にするというわさがあった事等である。しかしこれらの理由も彼女に同情をよせる方向には進まず，恨みは恨みを呼んでクリュタイムネーストラーは毒でふくれた悪徳の権化となる。

自らの腹からおろちを生むという，恐ろしい夢を見た翌日，彼女は夢のとおり，息子オレステスに胸を刺されて死ぬ。クリュタイムネーストラーは地にひざまずき胸をはだけて乳房を見せ,「これを喜んで吸ったお前にここが刺せるはずがない」と命乞いをするがオレステスはかまわず殺してしまう[16]。ヘレネーも同様の立場に陥いった事があった。トロイアが遂に陥落した日，メネラーオスはヘレネーを殺そうと抜身をひっさげて突進した。その時ヘレネーはまるで一撃をうけとめるかのように胸を露わにした。すると刀は床に落ち，二人は接吻した，という[17]。一方クリュタイムネーストラーの方は「こんなまむしを私が生んだとは，私の怨みの呪いの犬に用心おし[18]」と言いながら死ぬ。母殺しの罪を犯したオレステスはそれ以来,蛇の髪をしたエリーニュエス達に追いかけまわされるが,この復讐の女神達をけしかけるのが，今は亡霊となったクリュタイムネーストラーである。彼女は死人仲間にさえ見下げられ，ひどい目にあっている，それも皆あいつのせいだ，と叫んで，オレステスを追うのに疲れて眠り込んでしまったエリーニュエス達をたたき起すのである[19]。

二人の姉妹の極端な違いを見てみると，姉は妹の分担すべき不幸を一手にひきうけ，妹は姉が持てたかも知れない光栄を一手にひきうけている，と考えざるを得ない。このように分極的なものが一つの対として示されているのが，白鳥伝説の著しい特色である。

5．復讐するヘレネー

ところでヘレネーの美しさには神通力がある,と前に述べた。しかしこの魔力も女性達には通じなかった。ホメロス以外の作品では，沢山の女性達，そして幾人かの男性達がヘレネーに対する怨嗟の声をあげている[20]。中でも最も印象的なのが，エウリピデスの「トロイアの女たち」に於けるヘカベである。夫も息子も殺され，自らはオデュッセウスの捕虜として，娘達とちりぢりになって，トロイアの町を離れねばならなくなった。その原因は，今ここ

で自分達と一緒に悲しむふりをしているヘレネーにあると言って，ヘカベは嫁をひどくののしる。

> ああ，ヘレネーよ，そなたがゼウスの娘とはとんでもないこと，そなたの父親は一人や二人ではありません。まず第一は禍の神，第二には憎しみの霊，また血に狂う悪鬼や死神……ええ，死んでおじまい。そなたの美しいゆえに，この名にし負うトロイアの沃野が無残にも荒れ果ててしまったのだもの[21]。

ヘカベの嘆きには真迫性があって，エウリピデスの傑作の中でも傑作と言えるくだりであるが，彼はこの作品を書いた二・三年後に，「ヘレネー」と題する戯曲を書いた。この悲劇はあたかも「トロイアの女たち」でヘレネーにかぶせた汚名をすすぐために書いたかのように思える。ヘレネーがパリスに誘拐されそうになった時，美の競争に負けたヘラが悔しがってこの結婚を妨害するために，雲の一部からヘレネーそっくりの幻を作ってパリスに与え，本物の方はエジプトに避難させていた，という伝説がある。パウザニアスによれば，そもそもクロトンに住むレオニモスという人物が，不死となったヘレネーが住むといわれる“白い島”に行ったところ，「シケリアの詩人，ステシコロスが盲目になったのは，ヘレネーの不貞を非難する詩を書いたせいであるから，この中傷を取り消す詩を書くなら，再び光を見るであろう。」という声が天から降ってきた。それを伝え聞いた詩人がその通りにすると，たちどころに目が開いた，という[22]。戯曲「ヘレネー」はこの伝説にのっとったもので，彼女はヘラの計いでエジプトに暮らしているが，よこしまなエジプト王が結婚を迫るのに悩みながら，夫だけを思う貞女ということになっている。そこへ偶然流れてきたメネラーオスにめぐり合い，様々な工夫をこらして，二人で見事にエジプトを脱出する，という筋書きである。すると，幻のためにトロイア軍とギリシャ軍は戦ったわけで，勇士達の死は皆犬死にだったことになる。注釈者たちはそこにエウリピデスの平和主義のメッセージをくみ取ってきた。現代の我々が読むと，種々のテーマのパロディのよせあつめの感が強く，しかもあまりに幻想的すぎて魅力を感じない作品であるが，当時は大変な大当りをとった。

さてシチリアの伝説はギリシャにはどれほど伝播していたのだろうか。ステシコロスについても彼の作品についてもあまりよく知られていない。ただプラトンが「パイドロス」の中で，ヘレネーの汚名をすすぐために書いたという詩が三行引用されて，以後有名な伝説となった。

> これなるはまことの物語りにあらず
> おんみ　漕席うるわしき船にも乗り給ず
> トロイアなるベルガマの砦にいたりたまいしこともなし[23]。

しかしエウリピデスはこのテキストからヒントを得たのではなくて，シシリア帰りのアテネ人からの土産話として伝説を聞いたのをもとにして戯曲を書いたのだろうと言われている[24]。

さてこの伝説から我々が連想するのは，ヘレネーがネメシスの娘だったという異説である。ネメシスは夜（ニュクス）の娘で，復讐を人格化した女神である。エリーニュエスとは違って，人間の度を越した思いあがりや幸福を罰する役を受け持っている。

ネメシスとヘレネーを結びつける糸はテーセウス伝説にも見られる。ヘレネーがまだ十二才の頃，テーセウスは少女を誘拐して妻にした。アッティカ出身のテーセウスは地元の女神ネメシスを崇拝し，女神の神殿のあるラムヌースの谷は彼の町から見下ろすことが出来た。又アッティカにはヘレネー島という島があって，ネメシスがここでヘレネーを生んだという伝説が伝わっている[25]。テーセウスとの間にイピゲネイア（クリュタイムネーストラーの娘ともいわれている）が生まれたが，後に双子の兄弟達に連れもどされた。

ヘレネーの最も古い形は女神だったのではないかとする説は色々あり，彼女はアプロディーテーそっくりだったという話[26]や，ヘレネーという名前は言語学的にアプロディーテーに統合される女神のローカルネームであったという学説を立てる学者もいる[27]。ヘレネーが人間には持てない特権に恵まれているのを見ると，ヘレネーの古い形は女神であった事はほぼ間違いない，と思われる。ホメロスさえヘレネーのことを「恐ろしいほどその顔かたちが不死である女神達とそっくりである[28]」と書いてあるのは，こうしたヘレネーの前身を意識しての事だろうと思われる。ケレーニィはヘレネーはネメシスの娘でニュクス（夜）の孫であったという説が最も古いもので，ホメロスはそれを知りながら，フォークロール色を消すために，ゼウスの娘であることを強調した，と説いている[29]。

ヘレネーの神性を強調する伝説は外にも様々ある。例えばヘレネーは前述した“白い島”でアキレウスと結婚し，そこで不死の生活を享受しているという。別に夫メネラーオスと伴にエリュシオンの野で永遠に暮している，という説もある。またゼウスの計らいで星になった，という伝説もある。エウリピデスの「オレステス」ではオレステスはあらゆる不幸の源であるヘレネーを刺し殺そうとするが果たせなかった。最後にアポロンがデウス・エクス・マキナとして登場し，和解がもたらされるが，ヘレネーへの裁きは次の通りである。

> 見よ彼女（ヘレネー）はこの通り天界にいる。無事，汝の手にはかからず救われた。このわたしがゼウス様のご命令で救い出しさらってきたのだ。ゼウスの子であって見れば，不滅に生きねばならぬ。されば天界にあって，カストル・ポリュデウケスの仲間として船乗りどもの守護者となそう[30]。

後代の船乗り達はこのヘレネーの守護をありがたいとは思わず，むしろ恐怖していたら

しい。ローマのプリニウスは「ヘレナと呼ばれる恐ろしい凶の流星は，ポリュックスとカストールという双子の流星が現われると消える」という言い伝えを記している[31]。

次回は逆に「復讐されるヘレネー」の伝説の研究から始めたい。

注

(1) 谷川俊太郎『定義』思潮社，1981，pp.46－47.

(2) 母娘の一体化は神話にはよく起ることで，有名な例ではデーメーテールとペルセポネーがある。

(3) アイスキュロス『縛られたプロメテウス』呉茂一訳。筑摩書房，1964，p.19.

(4) ヘシオドス『神統記』，廣川洋一訳，未来社，1975，p.375.

(5) 煩瑣になる事を避けるため，文献は直接引用したもの以外は，著者名と本の題名，巻数，行数を引用するにとどめる。
オヴィディウス『転身物語』4，77，ヒュギノース『天文学』1，12，ノンノス『ディオニューソス譚』，31，17，エラトステネース『星座論』22.

(6) 尤もアポロンの白鳥には対立項として，死や冥界と結びつく闇の要素もあるのだが本論でこれを論ずる余地はない。

(7) ホメロス『イーリアス』呉茂一訳，筑摩書房，1981，p.38.

(8) *ibid.*, pp.43－44.

(9) ホメロス『オデュッセイア』高津春繁訳。筑摩書房。1981，p.332 sq.

(10) *ibid.*, p.420.

(11) *ibid.*, p.336.

(12) アポロドーロス『摘要』3，10，6－7 サッポー『断片』，105，パウサーニアース，『ギリシャ記』1，33，7，ヒュギノース『神話物語集』77，197，ピンダロス『ネメア競技祝勝歌』10，8，10，50.　ホラーティウス『詩論』147.

(13) エウリピデス　『アウリスのイーピゲネイア』1150，パウサーニアース『ギリシャ記』，2，22，3.

(14) エウリピデス　『アウリスのイーピゲネイア』1200.

(15) アイスキュロス『アガメムノン』呉茂一訳，筑摩書房，1964，p.74.

(16) アイスキュロス『供養する女たち』895.

(17) エウリピデス　『アンドロマケー』630.

(18) アイスキュロス『供養する女たち』呉茂一訳，筑摩書房，1964，p.100.

(19) アイスキュロス『慈みの女神たち』93.

(20) エレクトラ，アンドロマケー，イピゲネイア，カサンドラ，男性ではペレウス，オ

レステス等。

(21) エウリピデス『トロイアの女』松平千秋訳, 白水社, 1964, p.352.

(22) パウサーニアース『ギリシャ記』, 3, 9, 11. イソクラテス『エレーヌ賛』64.

(23) プラトン『パイドロス』, 田中美知太郎, 藤澤令夫訳, 岩波書店, 1957, p.149.

(24) Euripide, *Hélène—Les Phéniciennes,* texte établi et traduit par Henri Grégoire et Louis Méridier, Société d'édition "Les Belles Lettres", 1973, p.40.

(25) カール・ケレーニィ『ギリシャの神話・英雄の時代』, 高橋英夫・植田兼義訳, 中央公論社, p.259 sq.

(26) *ibid.*, p.346.

(27) Henri Grégoire et Louis Méridier, "*Communication*" in Bulletin de la Classe des Lettres, 5e série, tome 32. 1946, pp.255—265.

(28) ホメロス『イーリアス』呉茂一訳, 筑摩書房, 1981, p.38.

(29) Karl Kerényi "*Die Geburt der Helena*" in Mnemosyne, 3. Série, 7. Band, 1939, pp.161—179.

(30) エウリピデス『オレステス』小川政恭訳, 人文書院, 1964, p.370.

(31) プリニウス『博物誌』1, 18.